

令和4（2022）年度 長岡大学シラバス

授業科目名 科目コード	ボランティア論 (Introduction to Volunteer) 151036-14000					担当教員	米山宗久 (ヨネヤマ ムネヒサ)		
科目区分	教養科目	必修・ 選択区分	選択	単 位 数	2	配当年次	1年次	開講期	前期
科目特性	地域志向科目／知識定着・確認型 AL／協同学修型 AL／外部講師招聘科目								

① 授業のねらい・概要									
ボランティア活動の意義と理念、歴史的変遷、現代的課題について理解を深めると共に、実際の活動に必要な能力や視点を獲得することを目的とする。その上で、個人的志向に留まらず、社会の創造に貢献する為に、個々人が自ら何をなすべきかを模索する契機となることを目指す。また、活動内容の理解を深めるために一定時間のボランティア体験や視聴覚教材を用いたり、外部講師を招聘する。									
② ディプロマ・ポリシーとの関連									
地域社会に貢献する姿勢／職業人として通用する能力／専門的知識・技能を活用する能力を養う。									
③ 授業の進め方・指示事項									
教科書に基づき、追加的事項を補足しながら授業を進める。小レポートや小テストを実施して、フィードバックを行う。また協同学修型 AL では、外部講師を招聘してディスカッションを行う。さらにボランティア体験を実施しプレゼンテーションをしてもらう。									
④ 関連科目・履修しておくべき科目									
⑤ 評価 A に対応する具体的な学習到達目標の目安									
(i) ボランティア活動の意義と理念を理解する。 (ii) ボランティア活動の課題を理解する。 (iii) 実際の活動に必要な能力や視点を理解する。 (iv) NPO活動を理解する。 (v) 協働社会の必要性を理解する。									
⑥ テキスト（教科書）									
早瀬昇 (2018) 「参加の力が創る共生社会 市民の共感・主体性をどう醸成するか」 ミネルヴァ書房									
⑦ 参考図書・指定図書									
大阪ボランティア協会 (2006) 『基礎から学ぶボランティアの理論と実際』 中央法規出版 岡本栄一 (2005) 「ボランティアのすすめ 基礎から実践まで」 ミネルヴァ書房									

⑧ ルーブリック					
評価項目	評価基準				
	S 到達目標を越えたレベルを達成している	A 到達目標を達成している	B 到達目標達成にはやや努力を要する	C 到達目標達成には努力を要する	D 到達目標達成には相当の努力を要する
(i) ボランティア活動の意義と理念を理解する	地域共生社会実現を踏まえて、住民が主体的に参加する意義や理念を説明できる	地域共生社会実現を踏まえて、住民が主体的に参加する意義を説明できる	地域共生社会実現を踏まえて、住民が参加する意義や理念の資料等を見ながら説明できる	地域共生社会実現を踏まえて、住民が参加する意義の資料等を見ながら説明できる	地域共生社会実現を踏まえて、住民が参加する意義の説明を教員等の支援を受けても説明できない
(ii) ボランティア活動の課題を理解する	住民が主体的に参加する意義を踏まえて、ボランティア活動の社会的障壁を説明できる	住民が主体的に参加する意義を踏まえて、ボランティア活動の障壁を説明できる	住民が主体的に参加する意義を踏まえて、ボランティア活動の社会的障壁の資料等を見ながら説明できる	住民が主体的に参加する意義を踏まえて、ボランティア活動障壁の資料等を見ながら説明できる	住民が主体的に参加する意義を踏まえて、ボランティア活動課題の説明を教員等の支援を受けても説明できない
(iii) 実際の活動に必要な能力や視点を理解する	公私協働の視点を踏まえて、無償と有償のボランティア活動の多様性を説明できる	公私協働の視点を踏まえて、無償と有償のボランティア活動を説明できる	公私協働の視点を踏まえて、無償と有償のボランティア活動の資料等を見ながら説明できる	公私協働の視点を踏まえて、ボランティア活動の資料等を見ながら説明できる	公私協働の視点を踏まえて、ボランティア活動の説明を教員等の支援を受けても説明できない
(iv) NPO活動を理解する	災害ボランティア活動を踏まえて、NPOの歴史や具体的な活動内容を説明できる	災害ボランティア活動を踏まえて、NPOの歴史や活動内容を説明できる	災害ボランティア活動を踏まえて、NPOの歴史や活動内容の資料等を見ながら説明できる	災害ボランティア活動を踏まえて、NPOの活動内容の資料等を見ながら説明できる	災害ボランティア活動を踏まえて、NPOの説明を教員等の支援を受けても説明できない
(v) 協働社会の必要性を理解する	協働の必要性を踏まえて、地域、企業、行政の協働の意味や推進の必要性を説明できる	協働の必要性を踏まえて、地域、企業、行政の協働の意味を説明できる	協働の必要性を踏まえて、地域、企業、行政の協働の意味の資料等を見ながら説明できる	協働の必要性を踏まえて、地域、行政の協働の意味の資料等を見ながら説明できる	協働の必要性を踏まえて、地域、行政の説明を教員等の支援を受けても説明できない

⑨ 学習の到達目標（評価項目）とその評価の方法、フィードバックの方法								
学習到達目標（評価項目）	試験	小テスト	課題	レポート	発表・実技	授業への参加・意欲	その他	合計
総合評価割合	40%	15%		15%	20%	10%		100%
(i) ボランティア活動の意義と理念を理解する	8%	3%		3%	10%	2%		26%
(ii) ボランティア活動の課題を理解する	8%	3%		3%	10%	2%		26%
(iii) 実際の活動に必要な能力や視点を理解する	8%	3%		3%		2%		16%
(iv) NPO活動を理解する	8%	3%		3%		2%		16%
(v) 協働社会の必要性を理解する	8%	3%		3%		2%		16%
フィードバックの方法	小レポートやボランティア体験はプレゼンテーションを行い、小テストは解説を行う。							

⑩ 担当教員からのメッセージ（昨年度授業アンケートを踏まえての気づき等）
公務員や福祉関係の職業を希望している学生は必ず受講してもらいたい。ボランティア活動を実践する学生を対象とする。小レポート、小テスト、ボランティア体験報告を合わせて、7回程度行う。外部講師招聘時は予習として課題を提示する。

⑪ 授業計画と学習課題			
回数	授業の内容	授業外の学習課題と時間（分） （※特別な持参物）	
1	オリエンテーション	ボランティア活動の知識と理解	30分
2	参加の力	参加力を発揮した多彩な取り組みを理解	60分
3	ボランティア活動の基本的性格・定義	自主性・自立性を理解	60分
4	ボランティア活動の公共性	公共的な活動を理解	60分
5	ボランティアの歴史（1）	公共活動は行政のみかを理解	60分
6	ボランティアの歴史（2）	ボランティアの無償性とNPO活動を理解	60分
7	ボランティア活動の自発性（1）	市民と行政の取り組みの違いを理解	60分

8	ボランティア活動の自発性 (2)	当事者意識を広げ、市民の自治力を理解	60分
9	小テスト	1回～8回目授業のまとめ	60分
10	ボランティアの弱み	自発的社会活動の弱点を理解	60分
11	市民活動の意味	特定非営利活動促進法を理解	60分
12	ボランティア組織づくり	リーダーシップを理解	60分
13	公益法人制度	税制優遇や公益法人を理解	60分
14	ボランティア体験報告 (1)	ボランティア体験集約	60分
15	ボランティア体験報告 (2)	ボランティア体験集約	60分

#### ⑫ アクティブラーニングについて

知識定着・確認型ALを採用する。小レポート、小テスト、ボランティア体験を実施して、フィードバックを行う。協同学修型ALでは、外部講師を招聘してディスカッションを行う。

※以下は該当者のみ記載する。

#### ⑬ 実務経験のある教員による授業科目

##### 実務経験の概要

行政機関・社会福祉協議会・民間福祉施設では、生活保護・障害者福祉・高齢者福祉・ひとり親家庭福祉・児童福祉・介護保険制度や児童館に関わる行政業務、ボランティア支援・市民協働活動・福祉教育に関わる地域福祉・ソーシャルワーク業務、利用者の処遇・生活支援・相談業務に関わる利用者支援業務に従事してきた。また、行政計画である「地域福祉計画」「地域福祉活動計画」「介護保険計画」「障害者計画」の計画策定を行った。さらに「長岡市高齢者保健福祉推進会」「長岡市地域包括支援センター運営部会」「長岡市福祉有償運送運営協議会」「長岡市福祉施設指定管理者選定委員会」「長岡市男女共同参画審議会」「長岡市障害者施策推進協議会」「長岡市民生委員推薦会」などの委員を歴任している。

##### 実務経験と授業科目との関連性

社会福祉協議会における経験から、ボランティア活動における基本的姿勢や心構え、活動の意義や目的、活動内容や影響力、さらに活動における課題を学生に伝えることができる。  
たとえば、ボランティアを養成するためにコーディネーターの企画力や小学校からの福祉教育の必要性を伝えることができる。さらに実体験として消防団活動や防犯活動が地域住民の理解してもらうための必要性も伝えることができる。

また、地域福祉計画や地域福祉活動計画においても、ボランティア活動の現状と課題・問題点が明記されている。それらの知識を学生に伝えていくことによって、学生は現状と課題をまとめたり、課題解決策を導き出す能力を養うことができる。